
U S アンリミテッド・ストラトス

みぞがみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

US アンリミテッド・ストラトス

【Nコード】

N8928Y

【作者名】

みぞがみ

【あらすじ】

IS、正式名称インフィニット・ストラトス。本来女性にしか扱えないISを扱える男が二人現れた。一人はIS適正ランクBの織斑一夏。もう一人はDランクの桐原秋二。栄光の道を歩む織斑一夏と違い、苦難の道を歩む桐原秋二はその果てにたどりつけるのか。今、舞台の幕が上がる。

この作品はArcadiaに投稿されている観測様の『一夏以外がISに乗ったらこうなるだろ、普通。』に影響され、許可をいただいて書いています。

1 - 1 (前書き)

この物語はフィクションです。
実在する人物、団体、国家などとは一切関係がありません。

狭い。その部屋はまずそんな印象を抱かせる。

ワンルームの賃貸アパートの一室、十六？のその部屋には、ダンスやプラスチック製の収納棚、散らかった絵本やおもちゃなどで、ころうじて布団が一枚敷けるスペースしか残っていなかった。

「あなただけはしっかりと、健やかに育てて見せるから」

そんな部屋の中で、二十代後半に見える女が、小さな赤ん坊の頭をなでながら呟いた。精彩を欠いた様子から、この暮らしも彼女に大きな負担を強い、苦しいことがうかがえる。もしかすると、父親がいないのかもしれない。しかし、彼女の表情には子供に対する愛情がしっかりと浮かんでいた。

不意に、赤ん坊の目が開き、彼女にじやれついた。どうやら少しなでる力が強かったようだ。彼女はゴメンゴメンとあやしながらも、そんな仕草も愛しいようで、口元の笑みを強めると再びゆっくりとなで始めた。

「あなたには苦勞させるかもしれないわ・・・でも、強く、強く育て・・・」

不安を打ち消すように祈ると、息子が再び眠るのを確認した後、彼女も目を閉じ眠りに就いた。残されたのは静かな暗闇と晩秋の寒さだけだった。

桐原秋二は高校の予習テキストから顔をあげると、息抜きにテレビをつけた。ここ最近ニュースは同じことしか報道していない。今日もそれは同じらしく、どのテレビ局に変えてもタイトルは“男のIS操縦者現る”だ。

IS、正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活

動を想定し開発されたマルチフォーム・スーツ。“すべての現行兵器を圧倒する力”を持つがゆえに、当初の製作者の意図とは別に、宇宙進出は一向に進まず兵器へと転用された。しかし、女性以外に使用できないという致命的欠陥を抱えている。

このことからすると確かに大きなトピックだが、動かした者が織おり斑むら一夏いちかという名であることのみを、壊れたラジオのように二週間も流し続けるのはおかしい。おそらく政府の指示であろう。ISが発表されてからというもの、女尊男卑の考えがゆつくりと広まっている。特に五年前、一般に第一回目のモンドグロツソと呼ばれるISの世界大会が放映されてからは目を見張るものがある。来年の第三回モンドグロツソでさらにその傾向が強くなるかもしれない。来年には衆議院議員総選挙もあるし、男性主体の政党や男性の政治家が焦るのはわかる。しかしこの程度で女尊男卑が収まるわけがないと秋二は冷めた頭で考えていた。

（ただ女尊男卑の尻馬に乗っただけの女たちは新しいアイドルが生まれたぐらいにしか考えないだろうし、ISの軍事的な強さを理解しているものならそれなりの強さを見せなければならない。それこそモンドグロツソで優勝するぐらいの）

「秋二、政府から手紙が来とるぞ！」

と、そこまで考えたところで秋二は祖父に呼ばれたために思考を止めた。現在桐原秋二に両親はいない。母親は今から八年前に死んだ。死因は交通事故だ。女手一つ、それも正社員ではなくパートで養うのはとても大変だったのだろう、過労のためフラフラと道路に飛び出し、車に轢かれた。虫の知らせでもあったのか、死後に家から遺書が見つかった。

遺書には高校進学のために貯金してある口座の暗証番号と、これまで苦勞をかけたことについての謝罪文、けんか別れた両親へのメッセージがしたためてあった。父親については何も書いてなかった

が、父親の顔も知らない秋二はそのことに何も思わなかった。ただ、秋二は遺書の文面を初めて理解したとき、これから一緒にいてくれないことについての謝罪が書いてなかったことに、ヤケに腹が立ったことと、二度目に読んだとき、そのことが書いてないことに、「なんだか母さんらしいや」と思ったことが印象に残っている。

「わかった。今行く、じいちゃん」

はじめてこの家に来た時、「どうしてママを助けてくれなかった！」「とわめき散らす秋二を泣きながらやさしく受け止めてくれた祖父母に、今では感謝している。だから秋二は、最近耳が悪くなってきた祖父に元氣よく返事をする、テレビを消して少し急ぎ足で部屋を出て行った。

「ほら、これじゃこれ。たぶん内容はあれじゃろ、あれ。なんつったか、学、がく」

「学術理解向上のための第二次国民適性調査。物忘れも激しくなってきた？」

「そうかもしれない」

秋二の祖父、桐原源蔵きりはらげんぞうは肩をすくめると投げやりに答えた。

桐原源蔵は今年で七十一歳になる。去年の男の平均寿命は七十九歳なので、そろそろ心配になってくる。そんなことを言うと、「まだまだ現役！」の言葉とともに拳が飛んでくる。これがなかなか侮れなくて、結構痛いのだが、秋二はそれが元氣の証のようで、内心喜んでいる。いや、秋二は断じてMではない。断じて。

「それにしても、東京中探して反応する人が彼を除いていないんだから、諦めればいいのに。あくまで噂だけど、中国では二億人探して反応ゼロらしいからね」

秋二は第二次国民適性調査が無駄とは思っていなかったが、苦しい財政状態で源蔵の年金が減ることを危惧しそう言った。

「なに、そうなのか？そんなことテレビじゃやつとらんが」

「あくまでネット上の噂だよ。ソースもはっきりしないし」

「ほーん、それが本当なら日本じゃ無理かの。・・・ま、おまえはもう愛越学園に入学がきまつとるし、関係ないじゃろ」

秋二は今年十六歳で、私立愛越学園を受験した。愛越学園は自宅からあまり近くないが、偏差値は五十五程で合格判定はA、何より学園の卒業生の九割が学園法人の関連企業に就職するため、学費が安く、就職が安定しているからだ（就職率は九十三パーセント程で、五パーセントほどが進学する）。さらには地域密着型の経営方針で、ある日突然僻地に飛ばされることもないし、厚い社員層によって男性蔑視の女性や、逆に女性蔑視の男性の居る企業や個人に対応する体制をしているので、個人の希望する就職先に就ける。秋二としては、養ってくれている源蔵たちに引け目を感じていたし、楽をしてもらいたいので、愛越学園はまさに理想と言えた。

「いや、そうなんだけど、第二国適は厳密な処罰はないけど強制なんだ。無駄かもしれないけど、別に一日ぐらいどってことないし。

指定の日にも何もないから行くつもりだけど」

「まあ、指定の日っていつ？」

今まで台所で夕食の支度をしていた祖母の律子りっしが現れた。どうやらずっと聞こえていたらしい。

「今週の土曜日。二時からだって」

「そうですか。がんばってきてくださいね」

律子はニツコリと笑いながら励ましの言葉をかけた。

学術理解向上のための第二次国民適性調査、通称第二国適は世界で唯一ISを扱える男の出現によって生まれた。簡単に言ってしまうと、二人目のISを扱える男を探そうということだ。第二国適の前身、第一国適は東京都に住む十歳から二十歳の男性全員に 第一国適、第二国適ともに罰則がないため全員は検査を受けていないだろうが IS適性検査を受けさせると言ったものであったが、

適性を持つものが皆無であったため、調査範囲を広め、神奈川・埼玉県で再調査を行うことになったのだ。

もちろん、IS適性検査でがんばれば結果が良くなるなんてことはない。そうであれば、今の女尊男卑という考えなど生まれなかったはずだ。母の少し天然な所はあちゃん譲りなんだと、心の中で苦笑を浮かべながらも秋二は、

「うん、がんばってくるよ」

とそのことを顔に出さず明るい笑みで答えた。

秋二は現在、第二国適の会場にいた。第二国適はたいい公共施設の一室を借りうけて行っ。長つたらしい名前のこの多目的ホールは、とても複雑な構造をしていて、事前に内部の地図を持っていなければ確実に迷つてしまい、迷路と言われても納得できてしまうほどだ。そんな受験のときにもお世話になった多目的ホールを、秋二は右手に広げた地図と照らし合わせ、案内ぐらい用意しておけと思ひながら慎重に進んでいった。

（ここか？）

秋二は一面ガラス張りの廊下を抜けた先にある一室の前で止まった。やはり迷う人が多かったのか、扉にはでかかと第二国民適性調査会場と書かれた紙が張り付けてあった。

効率が悪いだとか、めんどつくさいだとか、心の中で愚痴をはきつつ秋二はゆつくりとドアを開けた。

「あー、君、検査生だよ。はい、向こうで着替えて。あつとゴメン、まず向こうの受付に第二次国民適性調査案内の封筒に同封された検査カードを提出して。その後のことはまた受付で説明されるから」

「はい。わかりました」

部屋に入ると、入口付近にいた女性が一息にまくしたててきた。簡潔に答えると、秋二は財布から同封されていたクレジットカード大の検査カードを取り出し、受付へと向かっていった。

まだ一時半なためか、秋二のほかには一人しか並んでいない受付でカードをリードしてもらい 技術の発展により、磁気カードは大変安価かつ比較的少ない情報を整理するのに便利になったため、こういう場面ではよく使われるようになった 、指示に従ってヘソ出しルックのISスーツに不満を覚えながらも着替え、奇妙な物体と対面した。

それを見て抱いた最初の感想は、“できそこないの鎧”だった。

人の形に似ていて、見方によつては忠誠を誓う主にひざまずく武士のようだった。しかし、秋二にはどうしてもそのようには見えなかった。ひざまずいてなお威圧感を与える大きさと、どのような攻撃も跳ね返しそうな厚い装甲は、確かに歴戦の武士然としたものかもしれない。だが、芯がない。どんな重い武器でも使いこなせるような太い腕部、どんな悪路でも駆け抜けられそうな脚部、そしてポツカリと空いた胴体。欠けた一つの部位で、それはとても頼りないもののように見えたのだ。

秋二にはこんなものが政治、軍事の切り札とは思えなかった。

「では機体に触れてください」

「っ はい。わかりました」

どうやら少し呆けていたようだ。軽く頭を振り、意識を入れ替え、ISの肩のように見える浮遊パーツに手を置いた。

「つつ！？」

キンツと金属質の音と、ザザツという二昔前の壊れかけたブラウン管テレビのノイズのような音が、強制的に頭の中に響いてくる。

そして、意識に直接流れ込んでくるノイズ交じりのおびただしい情

報の数々。

基本動作、性能、特性、現在の装備、行動範囲、アーマー・残量。
さらに酷くなるノイズ。

可能な活動時間、センサー精度、レーダーレベル、出力限界。

「ああああああー！！」

頭の中をかき回されるような情報の渦とノイズによる痛み、ISに触れていない左手で頭を押さえる。余裕がないせいなのか、本能的に今右手をISから離すと危険だと感じ取ったのか、右手を引くことは考えられなかった。ジクジクとした強烈な痛みが目が見開かれ、叫びとともに体中から脂汗が吹き出る。

「どうしたの！？」

異変に気がついたのだろう、何人かの研究員とここまで案内してくれた少しきつめの女性が駆け寄ってくる。そんな様子を、強引にながれたセンサー越しに見たのを最後に、秋二は気を失った。膝から力が抜け、ISにもたれかかる。その時、ISが秋二を抱きしめるように微かに動いた。

「だいじょうぶ？」

秋二が目覚めて最初に見たものは、会場に着いたとき、最初に案内してくれた女性と数人の救急隊員、数々の医療器具だった。

「どうして？」

まだ頭が働いていないようで、今の状況を把握することはできなかった。思い出そうと試みるが、残念ながら、頭が鈍く疼くということしかわからなかった。

「あなたはバスケットボール中に突然頭を押さえて倒れたの。覚えてる？」

女性はそう言うと、秋二の手を取りながら秋二にしか聞こえないように囁いた。

「ここじゃまずいわ。病院に着いてから話します」

「そう、ですか・・・あの、水ってありますか？」

事情も気になったが、今は体にまわりつくような倦怠感をどうにかしたかった。

そのことを聞いていた救急隊員から水の入ったコップを受け取ろうとする。

「あ、君が気を失う時頭を押さえていたそうだから、上体を起こさないで。私が飲ませますから。口をあけて」

胸に山岡と書かれたネームプレートをした人が、少しずつ水を口に含ませるようにコップを傾ける。秋二は二口ほど水を飲むと、口を閉じてもう必要ないことを訴えた。

その後も何人かが話していたようだが、秋二は考えることが億劫だったので、目を閉じ再び眠りに就いた。

秋二が次に目を覚ましたとき、やたら白い景色が視界に入ってきた。ゆっくりと体を起こそうとして、力が入らず諦める。きよろきよろと周囲を見渡すと、窓を覆う薄い白のカーテンから漏れる光がまぶしくて目を細める。二の腕からチューブが伸びていて、点滴の袋につながっている。

そこまで確認したところでノックの音が聞こえた。

「どう…ぞ」

何とか声が出たが、予想よりはるかに小さく、かすれた声だった。入ってきたのは初めてみる女性だった。アップでまとめた髪とぴっちりしたスーツ、しゃんとした立ち姿がよく似合っている。

「桐原秋二さんですね。私は文部科学副大臣つき秘書、飛知和理恵つげわづみと申します。あなたにはISについてのお話があります」

理恵はせかすように口早に言った。
「ISの・・・わかりました。お願いします」

秋二は疲れていて、正直、後にしてくれと言いたかったが、理恵の有無を言わさぬ視線と、何より今の自分の状況を思いなおし了解の意を伝えた。

「はい。では順番に申し上げます。」

まず、あなたはISの起動に成功しました」

「やっぱり、ですか」

秋二にはその予感があった。“IS”と聞いたときに、自分が知りえない情報が出てきたからだ。脳がはつきりしてくると、ISに触れた時のことが思い出される。信じがたいことだったが、疼くような頭痛が夢でなかったことを証明する。

「つきましては、桐原秋二様にISの日本登録簿を取得していただくための各種書類へのサインをお願いします」

ISとは、強力な兵器だ。少なくとも、政治や軍事に関わるものならそう認識している。当然、そのような力を保持するのなら責任の所在ははつきりさせておかねばならない。それがISの登録簿である。

「・・・ISに乗らないという選択肢は」

「残念ながら、それは許可できません。現在、国防力は第一にISをどれだけ所有しているか、第二にISの技術力をどれだけ所持しているか、第三にISを使いこなせる操縦者がどれだけ存在するかによって決定します。覚えていますか？白騎士事件を」

十年前、篠ノ之束博士しののたはねが発表したISは、当初認められなかった。

篠ノ之博士はISの発表を国際科学技術学会の名誉技術賞選定中に殴り込みをかけて行おこった。篠ノ之博士曰く、

「ハローみんな！こんなものよりも天才束さんがすごい発明しちゃったんだよ、ブイブイ」

そう言つて篠ノ之博士は、ISの基礎スペックといくつかのパーツの実験結果だけを開示した。製造理論や研究の展開した順序など、開示されていない情報は多い。特にISの中心たるコアの情報は少

なく、現在でもISのコアを作れるのは篠ノ之博士だけである。認められないのも当然というものだ。

しかし、現在では“ISはすべての現行兵器を圧倒する兵器”ということが認められている。それはひとえに白騎士事件があったからだ。

日本を攻撃可能な各国のミサイル二千三百四十一発。それらが一斉にハッキングされ、制御不能に陥ったあげく日本に発射された。だが突如現れた白銀のISを纏った一人の人物によって無力化された。その後も、各国が送り出した戦闘機二百七機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八基を、公式的には一人の人命も奪うことなく破壊することによって、ISは“究極の機動兵器”として一夜にして世界中の人々が知るところになった。これが白騎士事件だ。

「国際的に大変だったのにこういう言い方はおかしいかもしれません。僕が、僕は当時それどころではなかったたので、覚えていません。ですが、白騎士事件のことは知っています。何度も習いましたから」
秋二が六歳のとき母親が死んだ。十年前の五歳のとき、秋二は日に日にやつれていく母美咲のために気を使っていたし、精神の早熟が原因でいじめられてもいた。幼いころのことであるし、余裕もなかったたので、秋二は白騎士事件のことを覚えていなかった。

「・・・そう。当時は酷かったわ。日本は公式の軍隊が無かったからまだましだったけど、軍のある国、特にアメリカは酷いものだったわ。世界の軍事バランスが崩れ、いざという時防衛すらままならないんですから。・・・本当に多くの犠牲が出たわ」

理恵は、天井を見つめながらゆっくりと言った。あまりにも鮮烈で凄惨な記憶だったのか、今までの堅苦しい口調が崩れ、普段の調子が漏れていた。理恵はそのまま十秒ほど天井を見上げ、視線を秋二に戻した。

「現在の日本に余裕はありません。どうか、協力をお願いします」
「・・・・・・・・」

理恵の真摯な願いに秋二はすぐに答えられなかった。

沈黙が場を制す。しばらくの間、二人は黙っていたが、唐突に理恵が切り出した。

「あなたが我々に協力してくれるのであれば、働きに応じて給金が出ます。最低月に百万からです。さらにあなたの保護者に要人保護プログラムを適用し、有事の際には優先的に対応されるようにします。いかがでしょうか？」

理恵の言葉が終ると再び沈黙が降りた。

確かに破格の条件に見える。中卒の秋二に最低でも月給百万出す企業はないだろうし、もちろんISに乗れない場合の話だ、

要人保護プログラムを適用するということは国家体制で源蔵や律子の面倒を見てもらえるということだ。しかし秋二は首をすぐに縦に振らず、思考にふけた。

（要人保護プログラムの対象になるということはつまり国家の監視がつくということだ。

“二人目のISを操縦できる男が現れた”

このことは機密情報扱いされ、かん口令がしかれているだろう。しかし人の口に戸は立てられないし、第二国適の会場で何か異変が起こったことは国家権力であれば簡単にわかるはずだ。

ISの登場により各国は少なからず失策を講じてしまった。これ幸いと現政権打倒に動きだす集団の中に無視できない女尊男卑を煽る団体もいる。そんな国家にとって二人目のISを操縦できる男はのどから手が出るほどほしい人材となりうる。最悪男がISを操縦できるようにならなくても、新技術の獲得ができればまた盛り返すことができるかもしれない。

となると、各国は俺を確保するために動きだすかもしれないし、家

族を危険にさらすかもしれない。事態が穏やかに進行するかもしれないが、じいちゃんたちは住み慣れた日本で暮らしたいはずだ。仮にアメリカと契約することになったとして、じいちゃんたちは日本にいられるだろうか。

そもそも俺の考えは正しいのか？全ては俺の自意識過剰ということも・・・いや、文部科学副大臣の秘書が動いているということは、文部科学副大臣から何らかの指示が出たということだ。自意識過剰というわけではないと思うが。それにさっきはISに乗らないことはできないと言った。みすみす他国に渡すほど愚かではないと思うから、もし断られた場合脅迫の材料でも揃っているのか？それならば今のうちに受けるという考え方も・・・)

秋二がしばらくの間考えて出した結論は、

(しょせん高校に入学前の俺が処理できる問題ではなかったな。俺がISを動かしてしまったという事実が覆らない以上、俺たちが厄介事に巻き込まれるのは必然というものだ。ならばせめてじいちゃんたちが日本で暮らせるよう取り計らってもらおう) というものだった。

それを見越したのか、立ち続けていた理恵が問う。

「答えを伺ってもよろしいでしょうか」

「はい。俺は日本人として、日本のIS操縦者になります」

「ありがとうございます」

秋二はその言葉に本当の感謝の気持ちがかもっていることが分かった。そして差し出された理恵の右手をまだ痺れの残る右手で握った。

東京都千代田区霞が関の文部科学省の一室で男女が一人ずつ向き合っていた。

「それで、秋二君の協力は得られたんだな？」

「はい、副大臣。今日のところはまだ疲労が残っているとこのことで正式な契約書は後日改めて、ということになりましたが、彼が彼自身の意志で日本のIS登録籍を持つつもりであると証文を書いていただきました」

「それはよかった。で、実際のところ彼はISを動かせるのか？」

一人目のISを動かした男、織斑一夏は、ISを開発した篠ノ之博士と昔馴染みだ。正確に言えば、織斑一夏と篠ノ之博士の妹、篠ノ之箒が幼馴染であり、その関係からISの正式な発表と同時に失踪した篠ノ之博士とつながりがあった。また織斑一夏の姉、織斑千冬は篠ノ之博士と親友であり、IS適性はS　IS適性はS・A・B・C・Dで表され、Sに近いほどISを上手く扱える　で、五年前の第一回モンドグロッソの総合優勝者である。

つまり現在の研究機関では、織斑一夏にIS適性があるのは篠ノ之博士が干渉した結果という見解が強い。そんな中現れたのが、本人の証言では過去一度も篠ノ之博士に接触していない桐原秋二という少年だ。それゆえ文部科学副大臣、宍道和人はISが反応したという報告がされても信じがたいという気持ちかすてがぬぐい切れなかった。

「はい。研究者たちの報告では、彼は確かにIS適性Dランクが測定されているそうです」

「Dランク？私は政治家とはいえ、文部科学副大臣だ。それなりのISについての報告書を読んでいるが、Dランクというのは聞いたことがないな」

「一応、IS適性Dランクというのは実在します。しかしそれはあくまで理論的であって、現在までの女性のIS適性検査では発見されていません。織斑一夏も適性ランクはBです」

「なるほど、彼の価値がますます高まるな。どうせ情報は各国に開示しなければならんだ。彼の身柄だけでも確保するため、なるべく早くIS学園への入学手続きを完了させろ」

ISの登場により、十年前に現行していた兵器は全てその性能に信頼をおけなくなり、それ故に世界の軍事バランスは崩壊した。開発者が日本人ということもあり、日本がIS技術を独占的に保有していた。そのため、危機感を募らせた諸外国はIS運用協定 通称アラス力条約 によって全世界にISの軍事利用の禁止が定められ、日本へは情報開示と研究のための超国家機関の設立、ISコアの分譲などが求められた。

日本はこの条約を結ばなければならなかった。もし断れば第三次世界大戦が勃発した。そうなれば食料と石油や石炭などのエネルギー源を他国からの輸入に頼る日本は必ず負ける（当時の日本はISコアこそ所持していたものの、試作機すら完成していなかった）。しかし、ISとは突如現れた全く新しい技術体系を必要とするもので、言ってしまうえば、途方もなく金がかかるものだった。そんなISの研究機関 後のIS学園 を設立するには莫大な金がかかり、その割に研究成果は全世界で共有するとあって、日本に大きな負担をかけるこの条約を締結した現在の政府に対する不満は高まるばかりであった（種々の専門家が条件を緩和できたと主張している）。

そういった事情から、秋二の情報を日本は開示しなければならない。しかし、IS学園には特例事項が存在する。その一例として

“ 本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする ”

というものがある。今の日本政府の外交担当ははっきり言って弱気すぎる。アメリカに桐原秋二の身柄を渡せと言われたら従いかねない。

“ アメリカが日本人の桐原秋二を研究することによって男でもISに乗れる技術を発見した ” というのと、“ 日本が日本人の桐原秋二を研究することによって男でもISに乗れる技術を発見した ” とい

うのでは日本が受ける利益は段違いになる。そのため穴道は秋二をIS学園に速やかに入学させるつもりであった。

「しかしながら、問題があります。今年度のIS学園入学者の中に織斑一夏が存在するため、彼の所属することになる一年一組にはすでにドイツ、フランス、イギリスからの圧力がかかっています。二組には中国とイタリアから、四組はロシアから。残る三組は・・・例のアメリカの少女が・・・」

いくらIS学園に特例事項があったとしても、完全に国の影響力を遮断するのは難しい。現状で各国に介入されている一、二、四組に秋二を編入させるのはためらわれる。

「彼女は確かに日本を嫌悪しているからな……。しかししかたあるまい。そのあたりは秋二君に耐えてもらおうとしよう。他に何か問題は？」

「現状では特にないかと」

「そうか。彼のことは編入が終わるまで機密事項だ。彼に接触する者は信用に足るものにしてくれ」

そう言くと、穴道は別の案件の処理を始めた。

こうして桐原秋二はIS学園に入学した。

1 - 1 (後書き)

という一話目なんだが、突っ込みどころが多すぎる。そもそも原作からして・・・(ry

突っ込みどころは無くしていきたいと思うので、誤字脱字、文法間違い、その他ご指摘があれば感想に書いていただければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8928y/>

US アンリミテッド・ストラトス

2011年11月26日21時51分発行